

修羅シユシユシユ

—賢治先生の教室—

高谷信之・作

人物

宮沢清六

こう

宮沢賢治

きく

嘉助

風の又三郎

佐太郎

トシ

一郎

イチ

悦

ジヨバンニ

政次郎

カムパネルラ

河本

ジヨバンニの母

小菅

かおる

保坂

滝子

農林学校教師1

農林学校教師2

長坂

斉藤

晴山

根子

鳥捕り

車掌

青年

闇と音楽と　ーやがて光が入る。光りの中、一人の男がトランクを片手に立っている。宮澤 清六である。

音楽

清六　これはトランクです……待って下さい、ただのトランクではありません。

この中には、兄が詰まっています。わたしの兄、そう、宮澤賢治です。今でこそ兄は、誰もが知っている作品を残した作家として多くの人に愛されています。作家として、図書館や、本屋の棚の多くの場所をしめるようになりました。だが、生前の兄は、誰にもその作品を知られる事もなく、37年の短い生涯を閉じた、一人の無名の青年でした。

SE―不意に一条の風が吹いて来る。

清六　このトランクの中にはその無名の青年の原稿が、いや、様々な無念が詰まっているんです。

清六は中央奥にしつらえてある教壇の上にトランクを置く、そして客席

に向けたトランクの蓋を静かに開ける。不意に一陣の風が、トランクの中
の原稿用紙を空に舞いあげる。舞台の中は無数の原稿が舞いやがて
闇…… 短い溶暗。

灯りつくと舞台中央に黒板。黒板の前に教壇。宮澤賢治が立っている。
ここは花巻農学校の教室である。大正十三年の秋。教壇に向かって椅子
が据えられていて、生徒が客席に背を向けて座っている。

賢治 おはよう。

生徒達 おはようございます。

嘉助 先生、風だべ。

こう 原稿用紙が風で飛んだじゃ。

床に散らばった、原稿用紙を拾い出す生徒。

佐太郎 先生、なして原稿用紙ば、毎日教室に持ってくるんじゃ。

一郎 シー佐太郎。いったらいかん。

佐太郎 何でじゃ。一郎。

一郎 これは先生のコンプレックスじゃ。

佐太郎 コーンフレックス？

嘉助 (ポカリと佐太郎の頭を打って) わざといやしい未来に飛ぶな。

こう そうじゃ。今は大正十三年ぞ、1924年じゃ。コーンフレークスなんか存在していない。

佐太郎 そでない。先生のコンプ何とかってなんじゃ。

一郎 劣等感じゃ。

佐太郎 何じゃそれは？

きく 先生のは売れんのじゃ。

佐太郎 それで？

嘉助 それでじゃない。だからコンプを持ってきて、毎日わしらに読んで聞かせてるんでねえーか。

佐太郎 あー、わがった。それが先生のコンプじゃな。

こう コンプ？

佐太郎 コンプでよか。劣等感もコンプレックスも長いんじゃ。

嘉助 はい。先生、原稿用紙、集めたじゃ。(ト賢治に原稿用紙を集めて渡して)

賢治 ありがとう。

SE—再び風が吹く。

嘉助 あー、原稿用紙！

原稿用紙が舞う。二枚、三枚。その向こうにマントを着た少年が立っている。

きく あれは誰じゃ。

嘉助 わかった。あいつは風の又三郎だ。

音楽F I

又三郎 僕です。海の涯から、波を泡立て、北風を運んで来た、僕こそ風の又三郎です。時に冒険という剣を心に忍ばせ、夢と言う翼を背中に負って、僕は悲しみの荒野を駆け抜けて、たった一人でやってきました。

でも、僕はまだ銀河鉄道には乗れません。なぜなら、僕には死があまりにも遠すぎるのだから……

佐太郎 すかしてねーか。

こう かつこよすぎるべー。

悦治 あのかつこうはないべ。

きく 田舎にはあわねえ。

一郎 佐太郎、こう、やがましいーったら。きくしずかにしろ。

賢治 静かに皆さん。しずかに。

長い夏休みが終わりました。みなさん夏休みはどうでしたか？

はい。嘉助。

嘉助 おら、毎日川で泳いだ。

賢治 どうりで、表も裏も分からんくらい真っ黒だな。

こう 先生、嘉助は日に焼けたんでねえ。

賢治 どういうことだ。

こう もともと色が黒いんだ、焼けたわけではねえ。

生徒達 そんだ。そのとおりだべ。(ト笑う)

賢治 悦治の夏休みはどうだった。

悦治 おらあ、兄さんの草刈りについて行って、上の野原へ行った。

賢治 それから？

悦治 林の中で叫んだ。

賢治 叫んだ？

悦治 あゝ、鷹に負けねえくらいの声で叫んだ。

賢治 それはよかった。皆それぞれ楽しい夏休みを過ごしたと思う。

でも今日からは二学期です。昔から秋は一番身体も心もひきしまつて勉強のできる時です。ですからみなさんも今日から又一緒にしっかり勉強しましょう。

嘉助 (手を挙げて) はい、先生。

賢治 なんだ嘉助。

嘉助 先生早く、その子さ紹介してくれ。

賢治 あゝそうだった。高田君こつちへ。(ト又三郎を近くに呼ぶ)

又三郎 はい。

賢治 みなさんのお友達が一人ふえました。それはここにいる高田さんです。この方のお父さんは、今度会社の御用で上の野原の入り口へおいでになったのです。

きく 高田さんはどこから来たつすか？

賢治 高田さんは今までは北海道の学校におられたのです。

佐太郎 北海道？

賢治 いいですか、今日からみなさんのお友だちになるのですから、みなさんは、学校で勉強の時も、また栗拾いや、魚捕りに行く時も高田さんを誘うようにしなければなりません。わかりましたか。わかった人は手を挙げてごらん下さい。

生徒達 はい。(ト手を挙げる)

又三郎 はい。(ト手を挙げる)

賢治 (笑って) わかりましたね。ではよし。

喜助 先生。

賢治 はい。(指差す)

喜助 高田さん、名はなんていうべな。

賢治 高田三郎さんです。

喜助 わ、うまい、そりゃあ、やっぱり又三郎だ。

賢治 じゃあ、高田君、その席へ。(ト賢治は四年生の佐太郎の隣を指差す)

又三郎 はい。(ト席に付く)

賢治 それでは、授業を始めます。では一年生と二年生はお習字の支度をしなさい。三年生と四年生の方は算術帳と雑記帳と鉛筆を出して、五年生と六年生は国語の本を出して下さい。

生徒たち はい。

生徒たちはそれぞれに喋りながら準備をする。

賢治は黒板に数字を書き始める。

佐太郎が隣に居る妹のきくの鉛筆を取り上げる。

きく うわあ兄(あい)な木ぺん取ってわかんないな。

佐太郎 わあ、こいつは俺のだなあ。(ト鉛筆を懐に隠し、両手を袖の中に入れてしまう)

きく 兄な、兄なの木ぺんは一昨日(おととい)小屋でなくしてしまつたっけなあ。よこせつたら。

佐太郎 やだ、これはおれのじゃ。

きく かえしてくれ、兄な。

佐太郎 やじや。

きく よこせつたら。(なきべそをかいている)

又三郎 (黙って使いかけの鉛筆を佐太郎にさしだす)

佐太郎 くれる？

又三郎 うん。

佐太郎 (笑いながら懐の鉛筆を出してきくに返す)

賢治 みなさん。夢をもつてはいけません。

こう 先生、なして夢さもつたらいかんの。

一郎 そうじや、他の先生は夢ばもちなさいという。

賢治 他の先生の言う事はどうでもいい。だが、皆さん、夜見る夢は

いい。だども、夢を見てはならん。

佐太郎 なしてかね先生。

賢治 夢は醒めるからだ。夢は碎けてしまうからだ。

嘉助 逆説じや。

佐太郎 逆説ってなんね。

嘉助 反対の事さ言つて、夢をみるというとじや。

佐太郎 ややこしいのう。

賢治 夢の替わりに未来の設計図と描きなさい。

佐太郎 セツケエエズー

賢治 寝る前に毎日三分でいい。大人になった時の皆さんの姿を絵にして思い浮かべるのです。

嘉助 おら、パイロットさなりてえ。

一郎 お前が？なれるか！そりや無理だ。

きく わたすは看護婦さなりでえ。

一郎 おめえが？無理だべ。

賢治 無理な事はない、一郎。お前はなにさなりたいんだ。

一郎 俺はイチローになりたい。

嘉助 なってるべさ、もう。

一郎 そんなでない。ちゃんとしたイチローになりたい。

賢治 よし、それでいい、未来の自分の設計図を寝る前に今日から必ず、三分寝床の中で描くんだ。いいね。

佐太郎 先生は描いたすか？作家になろうと。

賢治 いや、子供の頃描かなかったんだ。何になろうとか。

佐太郎 それじゃ。原稿が売れないのはその所為じゃろ。

賢治 佐太郎。お前痛いところつくな。そうかもしれん。だが、先生はこう、思っちよる。「時代がわしより、ほんの少し遅れちよる」とな。

佐太郎 そうか、先生は早いんだへ。

賢治 わしは早いぞ、風の又三郎より早い。

佐太郎 そうだ、先生は早いんだ。

賢治 それでは、喜助はこれを読みなさい。声をだして。(本を渡す)

喜助 (本を受け取って読み出す) 原体剣舞連(はらたいけんばいれん) *mentai sketch modified*

その詩の題名を黒板に書く賢治。その中、喜助はその詩を読む。

喜助 *dahdahdahdahdahskodah*

dah

こよひ異装のげん月(げつ)のした

鶏(とり)の黒尾を頭巾にかざり

片刃の太刀をひらめかす

原体村(はらたいむら)の舞手(をどりこ)たちよ

生徒達 *dahdahdahdahskodah*

dah

賢治 こよい銀河と森とのまつり

準平原の天末線(てんまつせん)に

さらにも強く鼓を鳴らし

うす月の蜘蛛をどよませ

生徒達 *HO!HO!HO!*

女生徒

アンドロメダもかがりにゆすれ

青い仮面(めん)このこけおどし

太刀を浴びてはいつぶかぶ

夜風の底の蜘蛛をどり

胃袋はいてぎったぎだ

d a h—d a h—d a h—d a h—d a h—d a h—s k o—d a h—

—d a h

男生徒

夜風とどろきひのきはみだれ

月は射(い)そそぐ銀の矢並(やなみ)

打つも果てるも火花のいのち

太刀の軋(きし)りの消えぬひま

d a h—d a h—d a h—d a h—d a h—s k o—d a h—

d a h

又三郎

太刀は稻妻萱穂のさやぎ

獅子の星座に散る火の雨の

消えてあとない天のがはら

打つも果てるもひとつのいのち

d a h—d a h—d a h—d a h—d a h—d a h—s k o—d a h—

d a h

音楽 — 暗転。

清六 わたしは今、迷っています。兄の話をどこから始めようかと…
一八九六年明治二十九年、八月二十七日、岩手県稗貫（ひえぬき）
郡花巻町大字里川第十二地割字川口二九五番地に兄宮澤賢治は
生まれました。そこは母イチの里です。

賢治 そこから始めるべ。おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ。

いつの間にか賢治が舞台に立っている。

清六 兄さん……（困ったように）

賢治 清六、なして赤子は泣きながら生れてくるか分かるか？

清六 さあ……この世に生まれた事をはかなんですか？

賢治 それはちよつと文学的過ぎるだろう。じつはな清六、これは「
く最近分つた事なんだが。世界中の赤子は同じ周波数で同じ泣
き方さするんだ。

清六 周波数？

賢治 いいか、世界中の赤ん坊は同じ事を訴えて泣いている。

清六 なんと泣いて泣いているんですか。

賢治 産道を出て光を浴びた途端、痛い！眠いよう！と子供は泣く。

清六 そんなことが何時わかったんですか？

賢治 つい最近だ。

清六 最近って何時？

賢治 平成16年2004年のあの暑く長い夏かな。

清六 兄さん。人の思いや情が時空を越えて舞台に立つ事は構いませ
ん。でも、死者は時空を超えて情報を獲得したり、人に伝えた
りは出来ないんですよ。

賢治 普通はそうさ。

清六 というと？

賢治 清六、僕は天才だよ。いや、死して後、天才と呼ばれた男だ。

天才は時空ぐらいガラスのマントで超えさせてくれ。

清六 兄さんを天才にしたのは、僕ですよ。

賢治 お前が？

清六 いや、僕だけではありません。様々な人達、文学者や詩人、作
家やそしてなによりも数えきれない読者が兄さんを天才にし
たんです。兄さん。あなたは今ではあの夏目漱石よりも人気者
なのかもしれない。

賢治 あの夏目漱石か？

清六 そうです。『吾が輩は猫である』とか『坊っちゃん』を書いて、
今までお札の絵柄になっていたあの夏目漱石よりも。

賢治　でも俺はお札の絵柄にはならないんだろう？

清六　なりたいんですか？お札になって人の手から手にわたって、しわくちやになり汚れたいんですか？

賢治　そうじゃないさ。そうじゃないけどあんな貧乏で短命な樋口一葉だってお札になったんだろう？

清六　だから、日本は不景気なんです。せめてヤフーの孫さんとか金持ちをお札にすればいいのに……

賢治　何？なにか言ったか清六？

清六　兄さんちよつとすいません。そのまま少し黙っててください。

やあ！（ト気合を入れる賢治はそのままフリーズする）
姉さん、助けてください。（ト姉のトシを呼ぶ）

トシでてくる。

トシ　どうしたの清六。

清六　僕は兄さんの話をしてるんだ。

トシ　ええ、それで。

清六　兄さんがうまくからんでくれないんですよ。

トシ　どうして？賢さはそんなに悪い人じゃないよ。

清六　分っています。でも時々悪ふざけが過ぎるんです。

トシ 悪ふざけ？

清六 どうしてか、未来にばかり関心を示して。

トシ あら、それは元からじゃない。

清六 だけど、僕は兄さんのルーツから語りたいたんだ。

トシ だったら、童心に帰ればいいの。

清六 童心？

トシ わらわの心。ほら、いつか賢さがイギリス海岸と名付けた北上川に行ったことがあったでしょう。

清六 あゝ、そういえばあったね。そんなことが……

北上川のせせらぎの音やがて音楽に変わって、FI

賢治 おーい。早く来い。

トシ うわー、綺麗な流れだね、兄ちゃん。

清六 待って、僕そんなに早く歩けないよ。

賢治 どうだトシ、ここがイギリス海岸だ。

トシ イギリス海岸？でもここは川でしょ。

賢治 思うんだトシ。いいか、例え川でも、そう思えばここはイギリス海岸になる。

トシ 思えば？

賢治 そうだ。思うのさ。人はいつも夢を見て、それに願いを込めて思う。するとそれはいつか本物に変わる。

トシ 変わるんだ。

賢治 でも、強く念じて祈らなければならない。

トシ 思えば、変わるんだ。

賢治 (化石を取り出し)「ごらん、これはここで見つけた化石だ。

清六 化石ってなに？

賢治 化石は遠い歴史の記憶なんだ。

清六 良くわかんない。

トシ 清六、遠ーい、昔、おじいちゃんやおばあちゃんの生れるずーと前のことだよ。

清六 わかんない。僕そんな昔は生れてないもの。

賢治 うん。いつか清六にも分る時が来る。いいか、これはアンモナイトといって白亜紀の化石だ。

トシ 貝ですか？

賢治 貝じゃない、海に住む、軟体動物だ。ここはかつて海だったんだ。

トシ ここは川ではなくて海。

賢治 そう、その頃陸には絶滅寸前の恐竜がいたんだ。

清六 恐竜？

賢治 二本足で歩く体長15メートルのティラノサウルスとか、こう
二本の角と兜のようなえりまきを持った全長9メートルの犀
の親玉のような怪物トリケラトプスだ。

清六 昔、そんなのがいたの？

賢治 いたんだよ。空には8メートルぐらいの大きさのプテラノドン
と言う怪鳥が飛んで居た。

清六 会長ってどこの会長？

賢治 怪しい鳥と書いてかいちようだ。そこらの怪しげな会の会長じ
ゃない。

トシ そうか……人間もいたの？

賢治 いや、人間の先祖はまだいなかったといわれている。でも……

トシ でも何？

賢治 人間は居たと思う。

トシ どうして？

賢治 だって想像してごらん。恐竜だけが居て、人間の居ない世界の
空を想像してご覧。青くて、深いかもしれない。でも、それは
寂しいだろう。寂しすぎる空と思わないか。

トシ そうね。そんな寂しい青い空はいらないわ。

賢治 動物がいて、人間がいる。人間に恐れられたり、可愛がられた
りして、動物がそこにいる。

トシ 動物が先なのね。

賢治 そう、本当は動物がいて人間がいるんだ。でもそれは今では逆になってしまっている。

清六 ねえ、恐竜はどうしていなくなったの？

賢治 清六、いい所に気付いた。謎だ。恐竜は何故、突然地球上からいなくなったのか？

清六 謎？

賢治 巨大な隕石が激突したという説、大洪水が起ったという説。いろいろあるが、まだどれが正しいかは分らない。

トシ ある日突然か……それ悲しいね。

賢治 あゝ、だけど恐竜は密かに生き残ったんだ。

清六 生き残ったの？

賢治 生き残って、恐竜はやがて鳥になった。

清六 そうか、だから鶏の足は、鱗になってるんだ。

賢治 清六、頭がいいな、そのとおりだよ。プテラノドンという怪鳥はぐちゃぐちゃになった地球の上を飛びながら、小さな脳味噌で考えた。こんなに大きな軀では生き延びられない。軀を縮めて小さくしよう。小さい者はいつだって身軽だし、第一小さい者は可愛がられる。それは生き延びる術だ。やがて進化の過程で多くの鳥は小さくなり、可愛い姿となった。だが、その鋭

い目と鋭い爪と嘴、そして足の鱗だけは恐竜時代の名残をとどめ、消す事が出来なかったのさ。

清六 ふーん。そうか……

トシ 恐竜はやがて鳥になった………

賢兄いさん。質屋はつがないの。

賢治 あっその事か？

トシ どうしてもつがないの？

賢治 僕は物を仕入れて、その値段を高くして売るということが、どうしても出来ないんだ。

トシ でも、商売とはそういうものですよ。

賢治 そうだ。だからそれが悪いというんじゃない。僕には向かないんだ。それできのうもおとさんと喧嘩をしてみました。

更なる回想。父政次郎、母イチ出てくる。

政次郎 賢治、はっきり言ってみろ。家業を継がないのなら、お前は何になりたいんだ。

賢治 わかりません。

政次郎 わからんだと？

賢治 ただ、まっとうな人間でありたいんです。

イチ 賢治！

政次郎 ほう、ではわしの、お前の親のやっている事はまっとうではな
いとこう言うんだな。

イチ おどさん。

賢治 めっそもない。そんなことは言っておりません。

政次郎 言ってるじゃないか。わしが血と汗で築いてきたこの古物商と
質屋の商売をお前はまっとうな人間のすることではないと否
定して、自分だけいい子になろうとしている。

賢治 俺にはわからないんです。

政次郎 何が？

賢治 貧乏人から預かった物を、取り上げて高く売り飛ばすというこ
とが果たして……

イチ 賢治！

政次郎 いいかんげんにしろ！いいか、わしらはむしろ貧乏人が持って
きた物をかたに金を貸してやって助けているんだぞ。そして期
限のきれた質草をほしいという人に安く売ってやる。むしろ人
助けに近い事を、苦勞してやっているんだ。それをまるで盗賊
かなんかのように言うのは我慢ならん。

イチ おどさん。

賢治 わたしはお父さん、あなたを軽蔑して言っているではありません

せん。ただ、俺には合わないと言ってるんです。

政次郎 いや、お前はわしを馬鹿にしている。

賢治 わたしはお父さん。お父さんの事は尊敬しています。

政次郎 ほう、だったらお前は、なして本家の宗派である親鸞上人さ捨てて、日蓮の国柱会に入った。

イチ ほんとだよ。それだけはいけねえよ賢治さ。

政次郎 それだけでねえ！（トイチに）えっなして南無阿弥陀仏を捨てて南無妙法蓮華経を唱え始めた。百歩譲って、その改宗を親に勧めるとは何事か！

賢治 そのことは又後で機会を改めて、冷静に話しましょう。

政次郎 いいや、宗派の話はもういい。だが、もう一度聞く、お前はなに成り下がりたいとしているんだ。

賢治 だからわからないと言っているのです。敢えて言えば、晴耕雨読を理想とします。

政次郎 性交くどくだと？

イチ あんた、とうさま！

賢治 時に土を耕し、書を読み、出来れば、本を書きたい。そういう生活です。

政次郎 それで、どうやって飯を食うのだ。百姓をなめたらいかんぞ。片手間に出来るものではない。

賢治 片手間ではありません。

政次郎 いいか、お前の中にあるのは願望だ、現実ではない。願望で飯が食えるのなら人間なんの苦勞も辛抱もいらんというものだ。
勝手にせい！

政次郎は出て行く。

イチ おとうさ。(ト追いかけて、途中不意に賢治に向かって) 賢治さま
ちつとうまくふるまえ。ええね。おとさん！

回想戻る。

トシ 賢治兄さん。

賢治 なんだ。

トシ わたしは、今日思ったの。わたしは、兄さんの味方である。ず
っとずっと味方である。

賢治 トシありがとう。

清六 僕はわからないよ。

賢治 うん？

清六 どっちの味方か何てわかんない。だってまだ僕子供なんだもん。

トシ いいのよ、清六はそれでいいの。

清六 いいんだ……（やゝさびしそうに）

賢治 トシ……

トシ なあに兄さん。

賢治 人間はたったの五十年だ。もし長く生きたとしても15、6歳までは学校という檻の中の自由しか無い。

トシ それで？

賢治 65歳ぐらいになれば、軀の自由だってきかない。だとすれば織田信長の謡った人間五十年とは今も当てはまる。

トシ そうね。

賢治 だが……

トシ どうしたの？

賢治 これは予感なんだが……

トシ 何？

賢治 僕は短命のような気がする。

トシ 兄さんが短命？

賢治 あゝそうさ。そんな予感がする。だから、トシに頼みたい。

トシ 何を？

賢治 僕が早く死んだら、僕の作品を世に送り出してほしい。

トシ いいわ。そうする。わたし必ず兄さんの作品を世に出して読ん

で貰うの。でも、兄さん、死んじゃいやだ。

賢治 トシ、人間いつかは死ぬんだ。

トシ 兄さんが死んだら、誰とこんな話をするの？古代や宇宙の話
誰にしてもらうの。

賢治 その為に俺は沢山の童話や、小説を書いてるんじゃないか。

トシ でも、その話を賢兄さんの声で聞きたいの。

賢治 そうか……

清六 なんだかさ……

賢治 なんだ清六。

清六 兄さんたち、まるで恋人同士みたいだね。

トシ 清六……

賢治 あのかなあ……

清六 どうせ僕はいいけどさ、馬鹿でのろまの弟でいいけどさ。

賢治 おい、清六、どうしてそんなに自分を蔑む。まず自分を誇りに
思え、そうすれば人はお前を信じてくれる。

清六だけ灯の中に残る。トシは去る。

清六

「自分を誇りに思え」幼いわたしの心に染みた、おそらく最初の言葉だったと思います。その言葉の前に大人になったわたしはやがて付け加えたのです。どんな時もという言葉を。どんな時も、まず自分を誇りに思え、そうすれば人はお前を信じてくれる。

賢治はフリーズしていて。男が出てきて、手拭いと木の枝の杖を渡す。

清六

明治四十年、1910年。岩手県立盛岡中学校二年の六月彼は岩手山に初めて登ります。賢治十四歳の夏。それから賢治の何回にも渡る岩手登山が始まります。大正六年1917年賢治二十一歳の七夕の夜でした。この年四月、あの沢田正二郎が新国劇を立ち上げました。いえ、それは兄の話と何の関係もありません。兄は盛岡高等農林学校の交友会会報「アザリア」の編集委員となっていました。

岩手山中、賢治と保阪嘉内、河本、小菅。賢治達は手拭いを首に巻き、枝の杖をそれぞれに持ち、ズボンと学生服のような格好。

SE —ふくろうの鳴き声。野鳥の声。

河本 宮澤、少し休もう。

賢治 よし、小休止だ。

小昔 休むと酒が汗になってやつと毛穴から出てくる。飲みながらの登山はきつい。

保阪 程々にすればよかったんだ。いつもの事だ、宮澤が岩手山に登ろうと言いだすに決まってるんだ。

河本 俺はまさかと思ったよ。いきなり岩手山に登ろうなんて言いだすから。

小昔 そうか、河本は始めてか。

河本 あゝ、そうだ。小昔は知っていたのか。

小昔 もう、三回目かな。

保阪 「アザリア」の編集会議の後は、いつでも徒歩旅行だ。宮澤は議論が沸騰して熱くなると、いつでも「歩こう」って言い出す。

賢治 議論をすると何故だろう、俺は軀を動かしたくなって、ウズウズしてくるんだ。保阪はそんなことはないか？

保阪 俺はそんな風に思ったことはないな。

小昔 ということは、宮澤は文字を扱う事が苦手なんじゃないのか？

賢治 そうかもしれない。

保阪 そんなことはないだろう。宮澤が言葉や文字が苦手だなんて信じられんぞ。

賢治 いや、俺は妄想が好きなんだ。

河本 妄想？あっちの方か？

小菅 カワの妄想は御婦人のことだけだろう。

河本 女子（おなご）以外の妄想なんてあるか、俺たちにはないだろう。

賢治 いや、妄想にも色々ある。見ろ、天の川だ。

保阪 アー、まるで漆黒の海に宝石をばらまいたようだ。

小菅 そうだ、今日は七夕の夜ではないか。

河本 彦星と織り姫の、一年に一度の逢う瀬か。あれだって女子と男の妄想ではないか。

小菅 つまらん、それしかないのか？

河本 それが万物の原点だ。埋めるに埋められぬ穴があり、その穴を埋める為の艱難辛苦の道を、人は恋等と綺麗事に言ってみせる。だが本来は、本能と快楽によってなせる生殖と自己保存であり、自己解放の為に男と女はしがらんだり、嘆いたり、くつつたり、離れたり、所詮人間が生きるとはリッシンベンの性にしか過ぎない。

小菅 それがお前の哲学か。

河本 そうだ。なんとでも言え。俺が思うに人間は獣とあまり変わらない。理屈が後から付くだけだ。付くだけにめんどくさい。すな

おとは言い難い。

賢治 わかるよ。カワの言う事も。でも俺はこんな妄想をする。夜空を走る汽車の妄想だ。

保阪 汽車？

小菅 軽便鉄道か？

賢治 いや、あの銀河の間を走る、汽車なんだ。汽車の燃料はなんだと思う？

保阪 当然石炭だろう？

賢治 いいや、水蒸気で走る、汽車なんだ。そしてその汽車の乗客は友情なんだ。

河本 友情？おい。

賢治 いや、友情は壊れやすい、ガラスのように脆いものだ。そういう脆い、危うい、そしてはかない友情を乗せた汽車が、銀河の涯まで走って行くんだ。

河本 それは哲学の本か？

賢治 いいや、違うどちらかといえば音楽に近い。

保阪 音楽？

音楽 | FI

暗転

盛岡農林高等学校職員室。賢治、河本、小菅

賢治 「今だ、今だ、世のあらゆるものの上にあつて住むべき中がわかつてきた。あゝ最後の日は近づけり。さばきの日はちかづけり。偽善者よ去れ。俐口者よ去れ。……ほんとうにでっかい力。おれは皇帝だ。おれは神様だ。今だ。今だ。帝室をくつがえすの時は。ナイヒリズム」これの何処が危険思想なんですか！

農林学校教師1 読めば分るだろう。

賢治 先生がそうおっしゃったから今読んだのです。わたしには分りません。それは多少なりとも我々若者の奢りや高ぶりがあるかもしれません。でも、この保阪君の文章に、なんの危険思想が含まれていると言うのですか。

農林学校教師2 誰にでも分かる。

賢治 何がわかるんですか。

農林学校教師1 官沢、貴様反抗的だな。

農林学校教師3 まあまあ先生。

農林学校教師2 いいか、これは革命の決起を促したアジテーションだ。

このようなものを、日本で初めてという盛岡農林高等学校の交友誌にのせる事は断じてならん。

小菅 だったら、文章を変えればいいんですか？

河本 小菅、妥協はいかん。

小菅 妥協ではない。これは・・・

河本 保阪の除籍を撤回してもらうのが先だ。

小菅 だから、文章を・・・

賢治 小菅、いいか！文章を直したら意味がないんだ・・・

農林学校教師1 君達、少し整理してきたらどうだ。内部で意見の統一を計ってから、抗議に赴くべきだろう。違うか？

賢治 とにかく、保阪君の退学処分を取り消して下さい。この程度の表現で、学校を除籍にされたのではこれから何も意見を発表できなくなります。

農林学校教師2 無理だね。それにこの程度という認識が間違っている。こういう危険思想を書く為に交友会誌があるのではない。

農林学校教師1 学生は意見等発表するまえに、勉学の徒として勉強にいきなすべきである。

農林学校教師3 官沢君、あきらめたまえ。うちの場合、危険思想は駄目。駄目なんだ。な、そうなんだから。

賢治 先生！

光の中賢治のみ残る。

保阪出てくる。

保阪

宮澤ありがとう。君達が、自らの停学や除籍の危険も顧みず、僕を、いや僕の為に抗議してくれたことを僕は一生忘れない。

君は言った。『新しい文明を建設できる日はそう遠くはないだろう。それまでは静かに深く常に勉強絶えず心を修して大きな基礎を作っていく。』そのとうりだ・・・僕は故郷の山梨に帰って、百姓をやる。君達と話した新しい農業の可能性を身をもって実践していくつもりだ。いつか、君が語っていた「夜の銀河鉄道」あの物語が完成したら、どうか送ってほしい。雨の日に、僕は囲炉裏端で君の書いたそのメルヘンを読もう。そうしたら、離れていてももっと君の事を知る事が出来るだろうし、僕たちの友情は時空を超えて、もっと深まるに違いない。ではひとまずさようならするよ、宮澤・・・皆によろしく・・・

賢治

保阪・・・一つだけ間違いを指摘させてくれ。僕が書きたいのは「夜の銀河鉄道」じゃなくて「銀河鉄道の夜」だ。だが、保阪、僕はこの作品を何度も書き直している・・・書き直してはいるが、なかなか完結しないんだ。完結したら郵送ではなく、

僕が君の所まで届けようと思っている……それがいつになるのか……でも保阪、君は僕たちが語り合ったあの理想の農業を実践してくれ。これが別れだとは、二人の別れだとは……僕は思っていない。思っていないとも。

暗転

大正7年12月。東京、永楽病院（現東京大学医学部付属病院） トシが寝て居る。賢治入ってくる。トシ気付いて、起き上がる。

トシ 兄さん。

賢治 トシ、起きる事はない。

トシ でも……

感じ いいから、寝ていなさい。

トシ いいの、熱も少し下がってきたし、兄さんをちゃんと見て話したいから。

賢治 今、先生にお前の症状を聞いて来た。

トシ 先生はなんとおっしゃいました？

賢治 肺炎だそうだ。暖かくして養生すれば治る。

トシ 肺炎ですか……

賢治 どうした肺炎では気にいらんか。もつと重い難病がいいか。

トシ 兄さんはいつからそんなに意地悪になったのですか。

賢治 お前こそ、すっかり東京弁が板についたではないか。

トシ そうですか？

賢治 お前は東京弁が似合うからいい。俺は駄目じゃ。

トシ 賢さは東京弁をしゃべりたいのですか？

賢治 いいや、別に……

トシ 今日はおかしい。

賢治 何が？

トシ 兄さん。なんかあったんですか？

賢治 なんにもないさ。

トシ うそッ。又お父さんと手紙で喧嘩したんでしょ。

賢治 まあ、そんなところだ。

トシ わたしは兄さんの味方です。でも、兄さんも長男なんだから、

そのことはちゃんとおさえておかないとね。

賢治 保阪という俺の友達を知っているだろう。

トシ ええ、何度もお話を聞いたわ。保阪さん、確か山梨の田舎にお
帰りになったのではなくて。

賢治 百姓をやる為に一端は帰ったんだが……

トシ どうなさったの？

賢治 家を出た。いや、家を捨てたという手紙を書いてきた。

トシ そう……

賢治 おれには家を捨てるなんていう事は出来ない。出来ないどころか、考えも付かない。そう書いてやったよ。

トシ だから、兄さんは大変なのね。理想と家族への愛との間で引き裂かれてしまうのよ。

賢治 なに、大丈夫さ、現に昨日だって芝居を見に行ってきた。

トシ 芝居ですか？

賢治 そんなに怒るなよ。お前の事を心配してない訳じゃない。

トシ 怒ってなんかいないわ。なんの芝居を見たのですか？

賢治 芸術座の芝居だ。

トシ あの松井須磨子を見てきたんですか？

賢治 ああ、女以上の女が舞台に居た。

トシ そう、女以上のおんな？

母イチが入ってくる。

イチ なぬが女以上の女だ！

賢治 あっ。

トシ お母さん。

イチ 賢さ、あんたはトシの見舞いにきたのか、物見遊山に東京きたのか、はつきりすたらよかべ。

賢治 勿論俺はトシの見舞いに上京したじやい。

イチ だば、芝居見物にうつつをぬかしてる場合でねえべ。

トシ お母さん、もう熱も下がってきたし、わたしのことはもういいの。

イチ いぐねえ。どうなんだ賢治。

賢治 いやあ、すみません。ただトシの病状も安定したので、この際、色々出来る事はすべえと・・・

イチ 色々出来る事はか・・・賢さ、なしておとさんの言葉聞けねえんじや。

賢治 いやあ、聞けねえわけではねえつす。ただ、徴兵を逃れる為に研究生になれなんて言うから、それは聞けねえと。

イチ おどさんはお前の身を案じて。案じて、学生のままであれば後二年徴兵検査さしねえですむと言ってぐれてんでねえか。

賢治 そりゃあわかつとるけど。

イチ お前は国粹主義者か。

賢治 そんなことはねえ。

イチ だば、なして徴用を急ぐ。早く兵隊になって人殺しばしたいか。

賢治 そんな・・・

トシ お母さん……

賢治 俺は戦争は反対じゃ。

イチ そうだべ。そう言ってたでないか。

賢治 だけど、徴兵検査を先延ばしにするのも、好まねえ。

イチ なしてじゃ？

賢治 国の決まりは決まりだ。それはきちつと守りたい。

イチ お前の考え方はインチキじゃ、戦争に反対なら、徹底的に反対すべきじゃ。お前は動物を食うのは可哀そうといって、時々肉を食らう。貫くとはそういう事だねえ。志とはそんな事だねえ。

一度決めたら野菜以外死ぬまで食わねえことだ。(言いながら、母は風呂敷を開け竹の皮に包まれた握り飯を取り出す)

賢治 母ちゃ……

イチ 食うか(ト握り飯を賢治に渡して)だいじようぶだあ、肉は入ってネー、梅干しだ。

賢治 ああ(とまどいながら握り飯を受け取る)

イチ トシも少しどうだ。

トシ わたしはいらない。

イチ そうか、じゃ、失礼してめしば食べるべ。(イチは握り飯を食べ始める。賢治もしかたなく食べ始める)

黙々と握り飯を食べる二人。

トシ わだしもくれ、握り飯すごし……

イチ ああ(ト、食べかけの握り飯を割って渡す)

黙々と握り飯を食べる三人。やがて溶暗。

灯りつくと花巻農業学校の教室。賢治が黒板の前にたっている。それを取り囲むように生徒達。

長坂 起立！(生徒一斉に立つ) 礼！(礼をする生徒)

生徒達 おはようございます。

賢治 おはよう。

長坂 着席。

賢治 (「農」という字を黒板に書く) えー、斉藤、何と読む。

斉藤 農です。

賢治 そう農業の農という字だ。この上の曲、きよくという字は大工の使う、曲金の事です。下の辰は時を現す字です。辰は年という意味でもある。この意味を考えてほしい。いいね。

諸君は又、この土地、花巻で百姓をする為にこの農学校で学んでいるのです。東京へ行って農業をするわけではありません。そ

のことを充分心に留めて学んでほしい。さて、わたしの授業では教科書は開かなくてもいいです。そのかわり、わたしの話を一生懸命聞いてください。そして覚えるのは頭でなく、体の中に覚えて下さい。大切な事は何度でも体に染み込ませるようにおしえます。いいですね。

生徒達

はい。

賢治

では、最初にこれ(と正月のしめ縄を黒板に描く)これは何か、わかるね。はい、晴山。

晴山

うんこだべか・・・(生徒達笑う)つがうか・・・

根子

いきなりうんこはないべ。

賢治

そうだ。いくらわたしが変わっているといっても、一番最初の授業のはじめに『うんこ』を黒板に描かんだろう。晴山少し考

えろ。これはしめ縄だ。

晴山

はい。でも先生間違っています。

賢治

なんだ、言ってみろ。

晴山

おれは晴れる山と書いて、はる山です。晴れ山でない。

賢治

ああそうか悪かった晴山。だがこれはしめ縄だ。

晴山

はい。

賢治

これはしかし何を表しているのか？わかるか根子。

根子

相撲だべか？

賢治 おう、相撲か、確かに横綱はしめ縄を腰に巻いて土俵入りをするな。あれにも意味はある。しかししめ縄の元の意味だ。

生徒達 「わからんじゃ」「なんだべ」「なんの意味だべ」等の声

賢治 (絵を指して) これは雲。

生徒 くも！

賢治 この下に下がっている紙は雨だ。

生徒 雨！ザー！

賢治 そしてごへいは稲妻だ。

生徒 稲妻？ピカ、ゴロゴロ！バリバリーン！

賢治 そうだ。稲妻と雨は農業の守り神でもある。一年の豊作さ祈つて、正月にはしめ縄を掲げる。わかるね。

いいか、ではあの船橋にある無線局の塔の下にある麦畑。あの麦畑は肥料がいらなんだ。何故か？

斉藤 (手を挙げて) はい。

賢治 はい、斉藤。

斉藤 無線で肥料さ、送るんでないが？

生徒達 「あいつはばかだ」「無線でおくれるわけねえべ」「おぐれねえから無線だべ」「何いつてるお前」等など

賢治 静かに。いいか、稲妻は害虫を殺し、空気中のチツソを分解して、土のなかに雨となって徐々に染み込ませる。だから肥料な

しで麦が実る。

いいか、害虫の駆除と、チツソの肥料が麦にどれだけ大切かが、わかるだろう。

生徒達 「はーい」「ほー」「なるほど」「わかりました」等など

賢治 さて、飛ぶぞー！

生徒達 飛ぶ？

賢治 つぎは算術だ。(かかった時間(分子)÷距離(分母)の公式を黒板に書く)

長坂 飛びすぎだべ。

賢治 諸君の家から学校まで歩いて来るのにかかった時間。100メートル当たりの一年間の平均を出しなさい。

晴山 はーい。

賢治 はい、はれやま。

晴山 はれやまでねえ。

賢治 ごめん。はるやま。

晴山 うちほだいたい1キロメートルだから、いつも10分だから10分の一で一分だ。

賢治 ちがう。

晴山 えっ、だども……

賢治 いいか、晴山、寝坊して早足で行く日もあるべ。

晴山 ある。

賢治 友達さあつて寄り道する日もあつべ。雨が降り出して雨宿りしたり、まして雪ならもつとかかる。それをこうやってこの分数に加えていくんだ。いいね。公式にも心が有り、いろいろな事情があるんだ。そのことさ気付かねばならんよ。学問にはいろいろな式があります。諸君が知って居るものだけでも、方程式、分子式、化学方程式、それに卒業式だつてあるじゃないか（ト笑う）

生徒達 （しらーつとしている）

長坂 先生。

賢治 なんだ長坂。

長坂 卒業式は、やめた方がいい。

賢治 そうか、釜敷とかそういう方向にすべきだったかな。

長坂 いや、受けはねらわんでいいす。俺たち、先生の授業、しっかり体に染み込ませるから。

賢治 そうか……それならば「風の又三郎」出て来い！

音楽F I—風の又三郎現れる。

根子 あつ、風の又三郎！

風の又三郎 初めは孤独。孤独な火の玉。火の玉冷えて岩の塊。そして大きな地球の誕生。時は流れる。ひんやりと……千年、万年、何億年。そんなに、息を詰められない。そこで地球は息をする。すると大地はゆらゆら揺れて、海になったり、盛り上がったり……そしてやがて陸になる。陸には岩がゴロゴロと。何万年、何十万年。びょうびょうと、風が陸地をふきぬける。岩はそんなに我慢ができない。ぼろぼろになり土になる。時が流れてある時土に、たった一つの植物生える。植物は増え、草原になり森になる。

森には動物、海には魚……

生き物達は、それぞれの、命を生きて、やがて死ぬ。

何万年も何十万年もかけて、夥しい数のものたちが死ぬ。死んだもの達の亡骸を土の層が包む。いいや、そうではない。死ぬというよりもしかしたら休むんだ。それが命のありようさ。それが命のありようだ。

暗転。蒸気機関車（水蒸気機関車）の汽笛の音。

走る銀河鉄道の中。闇の中から声が聞こえる。

駅員の声 「銀河ステーション、銀河ステーション」

灯りつくつとジヨバンニが座席に座っている。宝石を撒いたような夜空。

ジヨバンニ 君は……

カムパネルラ (窓の外を見ている。顔が青ざめている)

ジヨバンニ 君はもしかしたらカムパネルラ？

カムパネルラ そうだよ、どうしたのジヨバンニ。

ジヨバンニ いや、僕はそのう、君がここに乘っているだなんて、思っても……

カムパネルラ みんなは随分走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれど追いつかなかった。

ジヨバンニ どこかで待っていようか？

カムパネルラ ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎えに来たんだ。

ジヨバンニ ……

カムパネルラ ああしまった。ぼく水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れて来た。けれど構わないもうじき白鳥の停車場だから。ぼく白鳥を見るのはほんとうに好きだ。川の遠くを飛んでいたってぼくはきつと見える。(言いながら円板のような地図をぐるぐる回している)

ジヨバンニ この地図はどこで買ったの。黒曜石で出来てるね。

カムパネルラ 銀河ステーションで、もらったんだ。君はもらわなかったの。

ジヨバンニ ああ、ぼく銀河ステーションを通つたろうか。今僕たちのいるところ、ここだろうか？

カムパネルラ そうだ。おやあの河原は月夜だろうか。

ジヨバンニ 月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。(跳ね上がりたい程愉快になつて、足をコツコツ鳴らし、窓から顔を出し、「星めぐり」の口笛を吹く)

ほら、ぼくはもう、すっかり天の野原にきた——それにしてもこの汽車石炭をたいていないね。

カムパネルラ アルコールか電気だろう。

汽車の走る音。

カムパネルラ あゝ、りんどうの花がさいてる。もう、すっかり秋だね。

ジヨバンニ ぼく飛び下りて、あいつをとってまた飛び乗ってみせようか。

カムパネルラ もうだめだ。あんなにうしろへ行つてしまったから。

汽車の汽笛。

カムパネルラ おっかさんはぼくを許してくれるだろうか？

ジヨバンニ おっかさん？

回想

ジヨバンニ 勢い良く家に入ってくる。母が寝ている。

ジヨバンニ お母さん、今帰ったよ。どう具合わるくなかった？

ジヨバンニの母 あゝジヨバンニ、活版所のお仕事はひどかったろう。今

日は涼しくて、わたしはずっと具合がいいよ。(起き上がる)

ジヨバンニ おかあさん今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげ

ようと思つて。

母 あゝ、お前先におあがり。わたしはまだほしくないんだから。

ジヨバンニ お母さん。姉さんはいつ帰ったの。

母 二時頃帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。

ジヨバンニ お母さんの牛乳は来てないんだらうか。

母 こなかつたらうか。

ジヨバンニ ぼく行ってとつてこよう ―ねえ、お母さん。ぼく父さんは

きつとまもなく帰ってくると思つよ。

母 わたしもそう思う。けれどお前は どうしてそう思うの？

ジヨバンニ だって今朝の新聞に、今年は北の方の漁はたいへんよかった

と書いてあったよ。

母 あゝだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。

ジヨバンニ きつと出ているよ。おとうさんが監獄へ入るようなそんな悪い事をした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄付した大きな蟹のおおらだのトナカイの角だの、今だって標本室にあるんだ。六年生なんか授業の時先生がかわるがわる教室へもっていくよ。

母 お父さんはこの次はお前にラッコの上着を持ってくると言ったねえ。

ジヨバンニ みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすんだ。ザネリが中心になつて。

母 お前に悪口を言うの？

ジヨバンニ うん。けれどもカムパネルラなんか決して言わない。カムパネルラはみんながそういう時気の毒そうにしていたよ。

母 あの人のお父さんとうちのお父さんとは、ちようどおまえたちのように小さい時からの友達だったそうだよ。

ジヨバンニ あゝだからよくお父さんは、カムパネルラのうちへぼくをつれていったんだよ。あの頃はよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコーランプで走る汽車があったんだ。レールを

七つ組み合わせると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。

母 そうかい……あつそうだ今晚は銀河のお祭りだね。

ジヨバンニ うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。

母 いておいで川へははいらないでね。

ジヨバンニ ぼくは岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ。

母 もっと遊んでおいでカムパネルラさんと一緒なら心配はないから。

ジヨバンニ あゝきつと一緒にだよ。

音楽 回想戻る。

カムパネルラ おつかさんは、ぼくをゆるして下さいさるだろうか。

ジヨバンニ きみのおつかさんが？

カムパネルラ あゝぼくのおつかさんが、ほんとうに幸いになるなら、どんなことでもする。けれどもいったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸せなんだろう。

ジヨバンニ きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。

カムパネルラ ぼくわからない。

ジヨバンニ どうして？

カムパネルラ ぼくは川には行ってしまった……

ジヨバンニ 川に入ったってカムパネルラ……

カムパネルラ いや、いいんだ。でも、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸せなんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さいると思う。

ジヨバンニ カムパネルラ。

カムパネルラ 何？

ジヨバンニ いいや。もうじき白鳥の停車場だね。

カムパネルラ あゝ十一時かつきりには着くんだよ。

SE — 汽車の走る音さらに続く。一人の男がジヨバンニの後ろから近付いてきて。

鳥捕り ここへかけてもようぢごんすか。

ジヨバンニ ええ、いいんです。

鳥捕り それでは失礼（ト二つの振り分けにした白い布で包んだ荷物を網棚において）あなた方は、どちらへいらっしやるんですか。

ジヨバンニ どこまでもいくんです。

鳥捕り それはいいね。この汽車はじつさいどこまででも行きますぜ。

カムパネルラ あなたはどこへ行くんです。(喧嘩腰で)

ジヨバンニ (笑う)カムパネルラ……

鳥捕り わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売
でね。

ジヨバンニ 何鳥ですか。

鳥捕り 鶴や雁です。鷺も白鳥もです。

ジヨバンニ 鶴はたくさんいますか？

鳥捕り 居ますとも、さつきから鳴いてますさあ。聴かなかったのですか。

ジヨバンニ いいえ。

鳥捕り 今でも聞こえるぢやありませんか。そろ耳をすまして聴いて
らんない。

SE — 汽車の走る音と水の湧くような音聞こえるのみ。

ジヨバンニ 鳥 どうして捕るんですか？

鳥捕り 鶴ですか、それとも鷺ですか。

ジヨバンニ (どうでもいいのだが) 鷺です。

鳥捕り そいつはな、ぞうさない。鷺というものは、みんな天の川の川
の砂をこごって、ぼおっと出来るもんですからね、そして始終
川へ帰りますからね。川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこ

ういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへ着くか
着かないうちに、ぴたっと押さえちまうんです。するともう鷺
は、かたまつて安心して死んじまいます。後はもう、わかり切
ってまさあ。押し葉にするだけです。

カムパネルラ 鷺を押し葉にするんですか。標本ですか？

鳥捕り 標本じゃありません。みんな食べるじゃありませんか。

カムパネルラ おかしいねえ。

鳥捕り おかしいも不審もありませんや。そら。(男は立って、網棚から
包みを下ろして手早くくるくると解いて)さあ、いりいなさい。
いまとつて来たばかりです。

カムパネルラ ほんとうだ。

ジヨバンニ 鷺だ。

カムパネルラ (指でそつと眼の辺りを触って) 眼をつぶってるね。

鳥捕り ね、そうでしょう。

ジヨバンニ 鷺はおいしいんですか。

鳥捕り ええ、毎日注文があります。しかしがんの方が、もつと売れま
す。雁の方がずつと柄がいいし、第一手数がありませんからな。
そら。(別の包みを解く) こっちはすぐ食べられます。どうで
す、少しおあがりなさい。

ジヨバンニとカムパネルラは少し食べてみる。それはおいしいチョコレートのようなのだ。

鳥捕り　もうすしおあがんなさい。

ジヨバンニ　ええ、ありがとう。(ト断る)

カムパネルラ　鷺の方はなぜ手数なんですか。

鳥捕り　それはね、鷺を食べるには、天の川の水あかりに、十日もつるして置くか、砂に三、四日うずめなきゃあいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、食べられるようになるんだ。

カムパネルラ　こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。

鳥捕り　そうそう、ここで降りなきゃあ(ト姿を消す)

ジヨバンニ　あれっ？

カムパネルラ　どこへいったんだろう。

ジヨバンニ　あそこへ行ってる。ずいぶん奇体だねえ、きっとまた鳥を捕まえるんだ。汽車が走って行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。

鷺が鳴きながら群れて降りてくる。鳥捕りは両足を60度を開いて、ちぢめて降りてくる鷺を次々と捕まえ、二十疋程を袋の中に入れる。やがて近付いて来て。

鳥捕り あゝせいせいした。どうも軀にちょうど合う程稼いでいるくらい、いいことはありません。

ジヨバンニ どうしてあすこから、いっぺんにここに来たのですか。

鳥捕り どうしてって？あなた何をいつてるんです。来ようとしたから来たんです。

ジヨバンニ 来ようとしたから……

鳥捕り ぜんたいあんた方はどこからおいでですか。

ジヨバンニ ……

鳥捕り あゝ遠くからですね。

SE |汽笛。汽車の走り行く音。

鳥捕り もうここらで白鳥区はお終いです。こらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。そしてあれは、水の速さをはかる器械です。水も……

車掌 切符を拝見します。

鳥捕りは黙ってかくしから紙切れを出す。車掌はちらっと見て目をそらし、ジヨバンニの方に指を動かす。

ジヨバンニ あのう…… (探すがない……)

カムパネルラ (ねずみ色の切符を出す)

ジヨバンニ (上着のポケットからはがきを四つ折りにしたくらいの緑の

紙がでてくる。それを車掌に渡す)

車掌 これは三次空間の方からお持ちになったのですか。

ジヨバンニ なんだかわかりません。

車掌 わからない。

ジヨバンニ ええ……

車掌 よろしゅうございます。南十字(サウザンクロス)へ着きます

のは、次の第三時ころになります。(車掌はいつてしまおう)

カムパネルラがジヨバンニの切符を覗く。鳥捕りも覗いて。

鳥捕り おや、これはたいしたもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの

天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手に

歩ける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こん

な不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける

筈でさあ、あなた方大したもんですね。

ジヨバンニ なんだかぼくにはわかりません。

カムパネルラ もうじき驚の停車場だよ。

いつのまにか鳥捕りはいない。

カムパネルラ あの人はどこへ行ったろう。

ジヨバンニ どこへ行ったのかな。ぼくはあの人が邪魔なような気がした

んだ。だからぼくは大変つらい。

カムパネルラ ぼくもそう思ってるよ。

ジヨバンニ ぼくはあの人がなんだか気の毒でならない。

音楽 — FI。清六出てくる。

清六 人は別れる為に出会い、出会う為に別れる……別れは道の涯に

現れては消える蜃気楼のようなものです。その蜃気楼に人は悲

しみ、人は歓喜し、やがて、そこに佇むのは自分一人だった事

にかろうじて気付くのです。兄は昔、一緒に住んでいた従兄弟

や僕に、沢山の話をしてくれました。この銀河を走る汽車の

話も何回も聞きました。賢治の親友との別れ、肉親との悲しい

別れが『銀河鉄道の夜』には窓の外の星屑のように散りばめら

れているのです。

兄宮澤賢治は、この原稿を何度も何度も改訂しました。しかし、『銀河鉄道の夜』も『風の又三郎』も未完のまま、完結する事はなかったのです。

音楽 — F O

六歳くらいの男の子が震えてはだしで立っている。となりに黒い服をきつちりと着た青年が手を引いて立っている。十二歳程の女の子が後ろから現れ声をかける。

女の子 あら、ここはどこでしょう。まあ、綺麗。

青年 あゝここはランカシヤイヤだ。いや、コネチカットだ。いやあゝぼくたちは空へ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上の印です。もうなんにもこわいことはありません。わたしたちは神様に召されているのです。

青年は男の子をジヨバンニの横に座らせる。そして女の子をカムパネルラの横に座らせる。

タダシ ぼくおねえさんのところへ行くんだよう。

女の子もしくしくと泣きはじめる。

青年

お父さんやきくよねえさんはまだ色々お仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしやいます。それよりもおっかさんはどんなに永く待っていらしたでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう。雪の降る朝に、皆と手をつないでぐるぐるにはとこの藪をまわって遊んでいるだろうかと考えたり、本当に待って心配していらっしやるんですから、早く行っておっかさんにお目にかかりましょうね。

タダシ

うん。だけど僕、船に乗らなけりやあ良かったなあ。

青年

わたしたちはもうなんにも、悲しいことはないのです。わたしたちはこんないいところを旅してじき神様のところへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちのかわりにボートへ乗れた人達はきつと皆助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんの家へ行くのです。

ジヨバンニ　あなたがたはどこからいらっしやったのですか？

青年

氷山にぶつかって船が沈んだんです。わたしたちはこちらのお父さんが急な用得二か月前一足先に本国へお帰りになったの

ジヨバンニ 邪魔じゃないけど。

カムパネルラ 銀河鉄道の軌道は変わるかもしれないね。

風の又三郎 そうか、だったらいいや、僕は行く。僕は戻るよあの学校へ。

ジヨバンニ それがいいかもしれない。ごめんね。

風の又三郎 いやいいんだ。それでは又……

ジヨバンニ それでは又っていうから、又三郎なのかな。

カムパネルラ ちがうだろう。それは。

ジヨバンニ そうか違うか。

かおる。窓の外の鳥を発見する。

かおる まあ、あの鳥。

カムパネルラ 鳥でない。みんなかささぎだ。

青年 カササギですねえ、頭のうしろのところに毛がピンと延びてい

ますから。

ジヨバンニ あれは何の火だろう。あんなに赤く光る火は、何を燃やせば

できるんだろう。

カムパネルラ サソリの火だな。

かおる あら、サソリの火の事ならあたし知っているわ。

ジヨバンニ サソリの火ってなんだい？

かおる サソリが焼けて死んだのよ。その火が燃えてるってあたし何遍も、お父さんか聞いたわ。

ジヨバンニ サソリって虫だろう？

かおる え、サソリは虫よ。だけどいい虫だわ。

ジヨバンニ サソリはいい虫じゃないよ。ぼく博物館でアルコールにつけてあるのを見た。尾にこんな鉤があつて刺されると死ぬって先生が言ったよ。

かおる そうよ。だけどいい虫だわ。お父さんはこう言ったの。むかしバルドラの野原に一匹のサソリがいたって。

音楽F I

サソリいきなり目の前の虫をその毒の爪で殺す。

サソリ どうだ、まいったか。0.03秒だ。俺が毒入りの爪をさつと立てりやあ、お前達のようなチンケな虫は虫の息だ。悪く思ふな。俺だって、生きてかなきゃあならんからな。お前達を食つて生きていく仕掛けになつてるんだ。そういうふうに造つたのさ、俺を。誰がつて？神様に決まつてんだろう。

イタチ おい、さそり。勝手にモノログやっつてんじゃねえ。

サソリ 誰だ？そういうお前は誰なんだい。

イタチ 俺だよ。お前の毒のきかねえ、イタチだよ。

サソリ 何しに来た。

イタチ 何しに？とぼけた事を聞くんじゃない。俺たちや人間と違うんだ。人間ならば、挨拶にやってきましたり、天気の話で時間をつぶしたりもするだろう。だが俺たちは互いに違う動物同士、出会ったが最後食うか食われるかだ。わかってんだろう。俺はお前を食いに来たのさ。

サソリ やめてくれ。俺はまだお前に食われるのはいやだ。

イタチ いやだ？このやろう。往生際の悪い野郎だ。覚悟しろ！

サソリ 待ってくれ！

イタチ 待てねえな。

サソリ 俺にはやり残した事がある。

イタチ やり残した？人間じゃあるまいし、ここで会ったが百年目だ覚悟しろ。

サソリ 待て、待ってくれ。俺は解き明かしたいんだ。

イタチ 解き明かす？なにを？

サソリ 何の為に俺たち動物は生れてきて、何の為に食い合って死んでいくのかを。

イタチ 馬鹿じゃないのか？そんな事考える虫や動物はこの世界に一匹

もないぞ。

サソリ だからこそ、俺は考えてるんだ。

イタチ うるせえ！問答無用だ！（トサソリを捕まえる）

サソリ あいたたた！よせ、やめてくれ、やめろ、あぁッ！（ト井戸に落ちる）

かおる イタチに追われて、サソリはあつと言う間に、井戸の中へ落ちてしまったんです。サソリは井戸の底で溺れ始め、そしてこういって祈ったのです。

サソリ あゝわたしは今までいくつもの動物の命を捕ったかわからない。そしてそのわたしが今度イタチに囚われようとした時、あんなに一生懸命に逃げた。それでもとうとうこんなになってしまった。あゝ、どうしてわたしはわたしの軀を黙ってイタチにくれてやらなかったんだろう。

そうしたらイタチも一日生き延びたろうに……どうか神様、わたしの心をご覧下さい。こんなむなしい命の捨て方ではなく、どうかこの次には、ほんとうの皆の幸せの為に私の軀を御使い下さい。これがわたしの最後の願いです。

サソリは死ぬ。すると真っ赤な光がサソリを包む。

かおる サソリは自分の軀が真つ赤な美しい火になって、燃えて夜の闇を照らしているのを見たって……その火は今でも燃えていて、お父さんはおっしゃった。それが、きつとあの火なのよ。

青年 そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちようどさそりの形にならんでいるよ。サソリの火が後方に移っていき、賑やかな樂の音や、口笛や人々のざわめきが聞こえてくる。たくさん豆電球がまるで千の蛍のように光りだす。

タダシ ケンタウルの露をふらせ。

ジヨバンニ あゝそうだ今夜はケンタウルの御祭りだね。

カムパネルラ ここはケンタウルの村だよ。

音楽 — F O 暗転。

闇の中から『船頭小唄』聞こえてくる。

清六 一九二二年、大正十年野口雨情作詞、中山晋平作曲船頭小唄が巷にはやっていた頃です。賢治は父に反抗し突然の家出、そして上京しました。しかしその年八月、兄賢治は一通の電報を受け取ります。『トシビョウキ、スグカエレ』。兄は、トランクに童話の原稿をいっぱい詰めて急遽花巻に戻って来ました。姉の

トシは東京の日本女子大学を卒業し、母校花巻高等女学校の先生をしていますが喀血し、療養生活に入ったのです。結核でした。入れ替わるように賢治は稗貫郡立稗貫農学校の教師となったのです。その年十一月二十七日、曇の降る寒い日でした。

寝ているトシ。賢治入ってくる。

トシ 兄さん。

賢治 トシ起きる事はない。

トシ いつかもそう言ったね。兄さん。

賢治 いつ？

トシ ずっと前……そうだ、わたしが大学生の頃、東京で肺炎になった時、おつかさんと兄ちやが見舞いに来てくれて……

賢治 そういえばそんな事があったなー。

トシ でも、わたし起きる。(咳き込む)

賢治 ほら、無理をするな。(ト寝かせようとするが)

トシ いいえ、今日は無理をするの。

賢治 なして……

トシ 兄さ、今日だけはわたしにわがままを言わせて。だってわたしもう兄さんと、賢兄さんと話出来なくなるんだもの。

賢治 ばかな事言うでねえ。お前は治る。きっと治るから。

トシ ううん……気休めはやめて、自分の事は自分でわかってるよ、すこしは……

賢治 トシ……

トシ いまから百年後に、わたしの詩の言葉を、心を込めて読んでくれる人、

きみは誰か――

いまから百年後に？早春の今朝の喜びの仄かな香りを、

今日のあの花々を、鳥達のあの唄を

今日のあの真紅の輝きを、わたしは

心の愛をみなぎらせ、君のもとに、届けることが出来るだろうか――

賢治 タゴールの詩だな。

トシ そう、大学生の頃、インドからタゴールがやってきて、その講演にお友達と行ったの。タゴールがこの詩を読み上げたのよ。素晴らしかった、感動して涙がこぼれたの……あの頃がわたしの最高の時だったなんて……今になってわかっていても遅いよね。

賢治 おい……

トシ 兄さん……ごめんね。

賢治 トシなんであやまる。お前があやまる事なんかなんもないだろ

う。

トシ 約束守れなくって……

賢治 なんの約束？

トシ いつかあのイギリス海岸で、兄さんの小説や童話を世に出して
読んでもらうって約束したのに……約束守れないや……だっ
てわたし兄さんより早く死じゃうなんて……思ってもみなか
った……(咳き込む)

賢治 トシ(トシの背中をさすってやり、咳が止まるとトシを抱き締
める)トシ！お前が死ぬなら俺も死ぬ。

トシ そんなことはやめてける。兄ちゃんや、やり残した事がいつば
い、いつばいあるべ。

賢治 トシ――

トシ 兄ちゃ、おらの顔、病気でこわくなってねえが。軀くさいべ。

賢治 そんなことはない。お前は綺麗だよ。くさくなんかない！

トシ やさしいな、兄ちゃは……

賢治 ……

トシ わがまま言っついていいか？

賢治 いいべ、なんだ、なんでも言っってみろ。

トシ 雪さ食べてええ。

賢治 よし、待ってる、とってきてやる。雨雪さ。

賢治は外へ出て、松の葉の積もった曇をお椀に掬って戻ってくる。トシの息は苦しい。 音楽F I

賢治 ほら、雨雪だ。(ト唇を指で湿らしてやる)

トシ あゝ、ひんやりしていい気持ち……今度生れてきたら、こんなに苦しまないように生れてくる。御免ね、約束守れんで……(トシ息をひき取る)

賢治 トシ……トシ!

賢治 ゆっくりと立ち上がって。賢治のみに灯り。

賢治 蒼鉛(そうえん)色の暗い雲から／みぞればびちよびちよ沈んでくる／あゝとし子／死ぬという今ごろになって／わたくしを一生明るくする為に／こんなさっぱりした雪のひとわんを／おまえはわたしにたのんだのだ／ありがとうわたしのけなげな妹よ／わたしもまっすぐにすすんでいくから／はげしいはげしい熱やあえぎのあいだから／おまえはわたしにたのんだのだ／銀河や太陽、大気圏などと呼ばれた世界の／空から落ちた雪の最後のひとわんを……

清六 大正十年、十一月二十七日午後八時三十分。宮澤とし子ことトシは息を引き取ったのです。享年二十四歳の若い命でした。

暗転。

音楽 — F O

SE — 汽車の汽笛の音

清六 二年後、大正十二年七月三十一日、賢治は北海道、サハリンへの旅に出ました。約十二日間の旅は、表向きは生徒の就職を頼みに行く旅でしたが、実際はとし子の面影を追う、追悼の旅でした。この旅が、銀河鉄道の夜に重なってくるという学者もいますが、確かな事は誰にも分りません。一番身近にいた私にさえもわからないのですから……一切が闇の、いや、銀河の彼方なのです。

更に汽笛聞こえて、再び銀河鉄道の中。

ジヨバンニ (深く深呼吸をする) カムパネルラ、また僕たち二人きりになったね。

カムパネルラ うん。

ジヨバンニ どこまでもどこまでも僕たち一緒に行こう。ぼくはもうあの
サソリのようにほんとうにみんなの幸いの為ならばくの軀な
んか百ぺん灼(や)いても構わない。

カムパネルラ うん。僕だってそうさ。

ジヨバンニ けれどほんとうの幸いはなんだろう。

カムパネルラ 僕わからない。

ジヨバンニ 僕たちしっかりやろうね。

カムパネルラ(答えをさけるように) あ、あそこ石炭袋だよ。空の穴だよ。

ジヨバンニ すごく暗く大きな穴だ。

カムパネルラ うん。

ジヨバンニ 僕もうあんな大きな闇の中だって怖くない。きっとみんなの
ほんとうの幸いを探しに行く。どこまでもどこまでも、僕たち
一緒に進んで行こう。

カムパネルラ あゝきつといくよ。あそここの野原はなんて綺麗なんだろう。

みんなあつまっているねえ。あそこが本当の天上なんだ。あッ

あそこにいるのが僕のお母さんだよ。

ジヨバンニ どこだよ。僕には見えないよ。

カムパネルラ ほら、あそこさ……

ジヨバンニ どこ?……カムパネルラ、ぼくたち一緒に行こうね。

ジヨバンニがふりむくとカムパネルラはもういない。

ジヨバンニ　カムパネルラ……カムパネルラ、おい！カムパネルラ……

あゝカムパネルラったら……（泣き出す）

ジヨバンニは目を覚ます。ジヨバンニは寝ていたのだ。

ジヨバンニ　夢か……僕は夢を見ていた……いけねえ！

ジヨバンニは起き上がり、やがて丘をかけ降りる。牧場の牛舎の前へ来る。

ジヨバンニ　こんばんわ。

牛乳屋　はい。（建物の中から出てきて）なんのごようですか。

ジヨバンニ　今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが。

牛乳屋　あ、すみませんでした。（奥から牛乳瓶を持ってきて）はい。ほんとうに済みませんでした。今日は昼過ぎうっかりして、子牛の柵を開けておいたもんですから、大将早速親牛のところへ行って半分ばかり飲んでしまいましたね……

ジヨバンニ　そうですか、ではいただいていきます。

牛乳屋　ええ、どうもすみませんでした。

ジヨバンニ　いいえ。

ジヨバンニは更に歩いて行く。橋のちかくまで来ると7、8人の人たちが固まって川を見ている。

ジヨバンニ　何かあったんですか？

村人　子供が川に落ちたんですよ。

ジヨバンニ　子供が？

村人　ええ。

マルソ　（走ってきて）ジヨバンニ。

ジヨバンニ　マルソ。どうした？

マルソ　カムパネルラが川へ入ったよ。

ジヨバンニ　どうして？いつ？

マルソ　ザネリがね。舟の上からカラス瓜のあかりを、水の流れる方へ押してやろうとした。その時舟がゆれたもんだからザネリは水へ落っこった。するとカムパネルラがすぐ飛び込んだんだ。

ジヨバンニ　それで？

マルソ　そして、ザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウに

つかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。

ジヨバンニ みんなさがしてるんだろう。

マルソ あゝ、すぐみんな来た。けれども見つからないんだ。あつあそ

ここにカムパネルラのお父さんが。

ジヨバンニ お父さん。

カムパネルラの父 あゝジヨバンニ。もう駄目だ。落ちてから四十五分も

経っているんだ。

ジヨバンニ あのうぼくはカムパネルラに会ってるんです……

カムパネルラの父 えっ？あゝ、今日学校でね。

ジヨバンニ いやそれが……あゝいえ、学校で今日……

カムパネルラの父 どうも今晚はありがとう。

ジヨバンニ……（黙ってお辞儀をする）

カムパネルラの父 あなたのお父さんはもう帰っていますか。

ジヨバンニ いいえ。

カムパネルラの父 どうしたのかなあ、僕には一昨日大変元気な便りがあったんだが。今日辺りもう着く頃なんだが。船が遅れたんだな。

ジヨバンニ、あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てください

いね。

ジヨバンニ はい。

汽笛の音。走る銀河鉄道の音。風の音。

風の又三郎 走れ！ジョバンニ！お父さんの帰ることを知らせに。牛乳を抱えてお母さんの元へ走れ。銀河鉄道よりも早く。風のように、そう僕、風の又三郎の様に。

風の音ブリッジで灯り変わって。

清六 大正十三年私は弘前歩兵隊に入隊しました。兄は徴兵検査で第一乙種で兵役は免除されていたのです。翌年大正十四年九月の事でした。津軽半島鰯ヶ沢の演習所に兄賢治が訪ねて来たのでした。

SE —ヒグラシゼミが鳴いている。

清六 兄さん。

賢治 清六。元気だったか。

清六 あゝ、兄さんは。

賢治 元気だ。お前、日に焼けたな！。

清六 毎日、演習だから、日にも焼けるさ。兄さん学校は？

賢治 休んで来たんだ。お前が病気でもしてるんじゃないかと心配になってさ。だって、随分手紙が届かなかったんだぞ。

清六 おかしいなあ、手紙書いたんだけど。

賢治 まあ、いいさ、こうして会えたんだから。ブドウ酒だ。飲むか。

(ト瓶をあける)

清六 ありがとう。(グラスについて貰いながら)ところでどう、この頃は。

賢治 うん。学校もなんか限界が見えてきたような気がする。

清六 限界？

賢治 あゝ。だんだんいろんな事が窮屈になっている。現に今月文部省令によって、学校演劇が禁止になった。

清六 演劇が？

賢治 そうだ。

清六 兵隊の僕がいうのもおかしいけど、時代がますます変な方へ流れていってるね。

賢治 そのとおりだ。それに……

清六 何？

賢治 生徒に農村にとどまって百姓をやれ、といっている本人が、農業をやっていないのでは、なんかとても心苦しいんだ。

清六 そんなことはないだろう。

賢治　　いいや、人は言葉にだして言った事は、必ず自分で実行しなければいけない。それでなければ、言葉は嘘になる。もともと言葉には嘘と真実がない混ぜになっているんだから。言葉を偽者にしてしまつてはいかん。わかるか清六。

清六　　そうか……たしかにそうだね。言葉を生かすも殺すも人なんだ。言葉を生み出したのは人なんだから……

賢治　　本の方は？

清六　　自費出版した『春と修羅』はあてが外れた。今では夜店でゾツキ本として五銭で売られて居るそうさ。

賢治　　でも『辻　潤』というアナーキストが読売新聞で絶賛してくれ たつていうじゃないか。

清六　　そうだな。あれは嬉しかったが、単にそれだけだよ。そうさ、いつかお前が東京にいた時に、「婦人画報」と「コドモのクニ」に売り込みを頼んだ時があつたよな。

賢治　　うん。僕の売り込み方がたりなかったんだ。「雑誌には向かない」つてあつさり断られたつね。

清六　　その事はいいんだ。そうじゃなくてあの時の童話「注文の多い料理店」をイーハトヴの童話集として次々に刊行しようと思う。

賢治　　そりゃあいい。

清六　　ぼくにはやりたい事が山ほどある。例えば物々交換。

清六 物々交換？

賢治 自分の家で使わなくなっているものをみんなが持ち寄って、こ
う広場かなんかで交換するんだよ。人間は一度貨幣を発明した
前まで戻ってみる必要があると思わないかい。

清六 なるほど。

賢治 それから、食用トマトの開発だ。

清六 食用トマト？トマトを食べようっていうのかい。

賢治 そうだトマトにはビタミンA・B・Cが含まれていて、欧米で
は、そのまま食べたり、ケチャップといってつぶして液状にし
て、料理にかけたりしているんだ。

清六 へえ……トマトは食べるんだ。

賢治 まだあるぞ。人を集めて、レコードを聞く会もやりたい。広場
に幕を張って幻灯会もいいな。

学校が駄目なら、百姓の皆と演劇をやりたい。いわば農民劇団
だ。

清六 じゃあ、まだまだ兄さん大丈夫だね。

賢治 大丈夫って？

清六 いつか言ってたよね。俺は短命かもしれないって。

賢治 うん。言ったかも知れない。トシにも言われた事がある。

清六 兄さん、それだけやりたいことがあれば、なかなかくたばらな

いよ。

賢治　　そうか。だが天折ってという言葉にまだに憧れているんだ、俺は……

清六　　天折か……ぼくは嫌だな、伸びかけた花の茎が無理やり折られたような感じがして。

賢治　　そうか、無理やりか……

音楽F I

清六　　そういつて、笑った賢治の顔がやけに寂しそうだったのをわたしは忘れません。その年の暮れ、兄の出版した「注文の多い料理店」は結局ほとんど売れず、千部のうち、三百部を兄は自分で引き取ったのです。勿論このシリーズは一卷で終わりました。やがて大正十五年、賢治は花巻農業学校の教師を止めて、羅須地人会に所属して、花巻郊外で自分で農業を始めたのです。賢治三十歳の春です。わたしは兵役を終え、除隊して建築材料やラジオを扱う宮沢商会を始めました。そうなんです。いわば、宮沢家の跡取りを弟の私が継ぐ事にしたのです。

花巻近郊、根子にある賢治の自宅。賢治忙しそうになにやら本を読んで

いる。江戸の春画である。滝子現れる。

滝子 ごめんください。(いきなり入ってくる)

賢治 はい(慌てて、春本を隠す。) あったっ滝子さん。

滝子 あら、先生、なにをあわてていらっしやるんですの。

賢治 滝子さん。先生はやめてくださいといったでしょう。ぼくはもう学校の教師ではないんですから。

滝子 でも、賢治さんはわたしの先生ですの。わたしそう決めたのですから。

賢治 決めた。決めたといっても、わたしはあなたになにも教えていません。

滝子 いいんですのよ。先生の存在そのものが、わたくしにとっては先生なのですから。

賢治 いいですか、あなたはクリスチャン。わたしは国柱会で日蓮を信奉する身です。おのずから、教えも違えば、教養も違ってくる。

滝子 いつから先生はそんなに狭い御心になられたの？あんなに無教会主義のクリスチャン斉藤宗次郎先生のことを尊敬なさっているとおっしゃっていたのに。

賢治 それは、私は宗教を超えて、内村鑑三先生や斉藤宗次郎先生は

尊敬しております。ですがそのことと……

滝子 なんの御勉強ですの？（と春本を手にとる）UTAMARO？

ウタマロ？

賢治 あ、それは、いけない！（既に滝子この手にわたっているので慌てて）

滝子 いけないって何が。

賢治 あ、いや、それは人から借りた本だから……

滝子 丁寧に、拝見しますわ。よござないように。

賢治 いや、だから返して下さい。

滝子 先生。わたしって意地悪なんです。そんなに必死になられると、返したくなくなるの。

賢治 たのむ。返さなくてもいいから、見ないでほしい。

滝子 あら、先生わたしって御茶目なの。見るなといわれると、どうしても見たくなくなるんですの。

賢治 止める。止めて下さい。あゝ……

滝子 （本を開いてしまう。凍り付く）……

賢治 あゝ……（顔を覆ってその場に崩れる）

滝子 おおきい……

賢治 （思わず）何が！

滝子 まあ、こんなに大きいんですの、殿方のあれって……

賢治 だから、なんででしょう。芸術には誇張とか象徴とか膨張とかがあるから！あ、いや膨張はなかった。何を言ってるのかわたしは……

滝子 先生。わたし見直しました。

賢治 （開き直り）結構です。見下げ果てて下さい。男子とはそういう者です。

滝子 いいえ、こういう春画を勉強しながら、農業に役立てようとなさっている先生を見直したんです。確かに生命の源はりっしんべんの性、セックスですわよねえ。

賢治 違う！違うだろう。農業に春画は関係ない。今日は帰って下さい。

滝子 いいえ、わたくし、宗教を超え、師である先生との垣根も越えて、恋をしてしまったのです。

賢治 恋をした結構。どんどん御婦人は恋をして綺麗になって下さい。わたしには特に関係のない事です。

滝子 関係ですって？関係は恋に落ちてからもちますのよ。先生、わたしをいやしい女等と思わないで下さい。わたしは……わたしは……

賢治 どうしたの？病気ですか？

滝子 病気です恋の病。

賢治 だからそれは御自由に他へ行かれて直されたら……

滝子 誓って！女が自分から告白することを卑しいなどと思わないって。

賢治 そんなことは思いませんよ。

滝子 わたし、先生が好きなんです。

賢治 先生って……えっわたし？

滝子 ええ、ホーリング、ラブ。わたしは恋の病に落ちました……

賢治 待つて下さい。わたしは……そうだわたしは病気なんだ。

滝子 病気？先生も恋の病ですか？

賢治 わたしはそんな形而上学的な病ではありません。わたしの病気は……

滝子 あなたの病気は？

賢治 花柳病です。あっちのほうの病です。ですからあきらめて下さい。うつります。さわらないで下さい。触るとうつるんだから。

滝子 うそばかり。先生、知ってますのよわたし。先生が御婦人の御体験がない事を。(ト手を取り迫る)

賢治 そんなことはわたし以外の誰が知っているのですか。

滝子 ね、先生、わたしがわたしが教えてさしあげてもいいのよ。色々な知識を教えて下さったお礼に。(更に迫る)

賢治 やめてください……お願いします。

高橋慶吾が入ってくる。

高橋 宮澤さん。あつ？失礼。

賢治 失礼じゃない。こっちへこっちへ。

高橋 御邪魔でした？

賢治 いいや、危ないところだった。

滝子 高橋君はつきり言って邪魔！邪魔以外の何者でもないわ。

賢治 どうした？

高橋 いや、今日は肥料の混合の実習をするといって、下の畑で、皆待っていますよ。

賢治 そうだった。忘れていたよ。

滝子 わたし帰ります。この本、おかりしてつていいかしら、先生。

賢治 あゝ、いやその本は。

高橋 なんの本です？

賢治 駄目だ。この本は駄目！

高橋 どうしたんですか？おかしいよ二人とも。あゝそうか、そういう事なんだ。だったらぼくはキューピットですよ。滝子さんを宮澤さんに紹介したのは僕なんだから。

滝子 わたくし、今日は帰ります。(ト出て行く)

賢治　高橋君、えらい人を紹介してくれたね。

高橋　はあ？……

蝉の羽音聞こえて。賢治の実家。

政次郎　イチ、賢治。

政次郎　いいか賢治。俺はおまえさ許した訳ではねえぞ。

賢治　なんのことですか。

政次郎　本来なら、店を継ぐべき長男が、フラフラフラフラ、せっかく決まっていた教師という天職さ投げだすて、百姓さやるなんて。

清六が店を継ぐからといって、お前の責任がなくなったわけではねえんだ。

イチ　ほんとだよ。お前伯母さんの持つてくる見合いさ、断り続けて……そんなもってこんどの不始末だ。どうなんよ。

政次郎　大体お前の苦しみは自分で造ったことだべ。自らまねいたことでないか。

賢治　だども、俺が好きでねえ女子になんであんなに追っかけられねばならんのか、自分でもわからん。

政次郎　そでない。お前ははじめてあの女子にあった時、白い歯をだし

たべ。

賢治 うんにゃ。

政次郎 胸さひろげて、甘い言葉かけたべ。

賢治 そんなことはしてねえ。

政次郎 だったらなして、お前に惚れる。お前のようなコチコチのくそ真面目なふりしてる男に女は惚れねえ。

イチ おとさん。それは経験ね。

政次郎 経験？経験でねえ。だどもわかるんだそつたらことは。

イチ なしてね。なしてわかると？

政次郎 今はそつたら事はどうでもええ。ともかく、お前の頭の中は、本で都合をつけた事しかつまっとらん。もっと世の中の常識やら、辛抱を身を持って学べ。男が三十にもなって、女の一人さばけんで、どうするんじや。

イチ おとさんはよけい、さばいてきなぎったもんね。

政次郎 いいか、今はそつたらことはいいんじや。

イチ あんたはよくても、わたすがよくないす。おとさんもそろそろ、帰るべき所さ、帰ってくれないと。

政次郎 わしは、帰ってきてるでないか、こうして。

イチ ま、いいですけど……

政次郎 おい、イチ。お前……

賢治　なんとか自分で解決します。だから御見合いは断って下さい。

イチ　また断るのか。賢治、もう二十だぞ。

政次郎　そうだ。三十にして立つと昔から言う。今度ばかりは、見合いをせい。

賢治　断ります。ぼくはまだそんな資格もありませんし、第一そんな気になれないんです。

政次郎　女子が怖いか？

賢治　怖いかどうかもわかりません。でもとりあえず、必要としないのです。

政次郎　必要でない？それはなあ、考えようによっては女子は怖い。どんどんばけて行くからナ。かあさんがいい例えだ。

イチ　あんた。言うにことかいて！

政次郎　いや、だけども、男一匹、唯我独尊では駄目だ。恐れる者を一つは持て。ええか、それによって男は強くもなるし、一人前にもなるんだ。

賢治　わかりました。恐れるものを持つてという言葉だけは、いただきます。でも、それ以外はやはり、お父さんとは分りあえない事を、確認しました。帰ります。

ト賢治は出て行く。

政次郎　おい、賢治！

イチ　賢治さあ……

政次郎　まったくあいつは……

清六に灯り入る。

清六　時は一様に流れるのか？いいえ、時は、ひとりびとりの頭の上

を星のように巡っているのです。それぞれの星が違うように、

それぞれの時も実は違うのです、きつと……ただ人は自分の生

涯の終わりを迎えて、やっと気付くのです。人とは違う自分だ

けに巡る時の終焉を……あゝ、あいつともあの人とも違う、わ

たしの時、わたしだけの時に終わりがきたのだと……それを孤

独という二文字以外、どんな言葉があるというのですか。どん

な言葉が……

時代は昭和……昭和六年秋。仕事で上京中に高熱を出した賢治

は、花巻の両親に遺言状を送ります。

イチが手紙を読んでいる。

イチ この一生の間、どこのどんな子供も受けられないような厚いご恩をいただきながら、いつも我儘でお心に背き、とうとうこんな事になりました。今生で万分の一もついにお返しできませんでした。ご恩はきつと次の生、また次の生でご報じたいとそれのみ念願いたします。どうか信仰というのではなくても、お題目でわたしをお呼び下さい。そのお題目で絶えずおわび申し上げ、お答え致します。九月二十一日 賢治 父上様、母上様。

政次郎 ばか者が！

イチ おとさん……

政次郎 あいつは分かつたらん。とことん分かつたらん。何が親不孝なのか。日蓮の改宗も、わしの後を継がんことも、結婚もせんで、うろろうしとることも……親に逆さ見せることには比べたら、ほんのささいな事だつてことがわかつたらん。えっ、そうじゃろうが、賢治！

みると賢治が横たわっている。

賢治 南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経。(合唱している)

政次郎 賢治！

賢治 先立つ不幸をお許し下さい。

政次郎 賢治、いいか、わしらより先に死ぬな。逆さを見るのはトシだ
けで十分だ。

イチ 賢さ、ほんとだよ。長男がわしらを置いてさきに行ったらいか
ん。

賢治 すみません。(清六に) 清六、オキシフルと脱脂綿を持ってきて
くれ。

清六 はい。

賢治 そうだその前に水を一杯。

清六 分かりました(清六は去る)

賢治 わたしは頑張ってきました。精一杯。でももう駄目なようです。
政次郎 ばか者、頑張るだけじゃ駄目だ。誓え、わしにたった一つで
いい、反抗し続けたわしに、死なないと誓え。

イチ ほんとだよ、賢さ。

賢治 ごめんなさい。もう駄目なんです。

政次郎 何故だ、何故さからう。一度でもいい、誓って見せろ、死なな
いとー

清六 はい。お水です。(水を飲むのを手伝う)

賢治 あー、うまかった・・・おとさん。お願いがあります。最後の
お願いです。

政次郎 なんだ……言ってみろ。

賢治 国訳妙法蓮華経を一千部作り、わたしの知り合い、わたしの友達に配ってほしいのです。

政次郎 分かった。やってやる。

賢治 ありがとうございます。山梨にいる保阪嘉内にもお願いします。

政次郎 保阪だな。まかせておけ、だが賢治……

賢治 すみません。

清六 オキシフルだよ。これは？（オキシフルと脱脂綿を渡す）

賢治 準備だ……（オキシフルで体をくまなく拭きだす）

清六 準備？

賢治 死体になる準備だ……

清六 兄さん……

賢治 なあに、死んだら誰だって死体になる。それだけだ。それだけだよ清六。

清六 ……

政次郎 賢治！

イチ 賢さあ――

賢治 拭き続ける半ばで、脱脂綿を取り落とし、息を引き取る。

清六 昭和八年九月二十一日、午後一時三十分の事です。賢治は永遠

の眠りについたので。賢治二十七歳の秋でした。

兄の星はその動きを止め、輝きを止めました。それからしばらく後の事です。兄のトランクのポケットから小さな黒い手帳が出てきました。(手帳を出して) 日付は昭和六年11月3日となつています。この頃既に兄は結核による肋膜炎で病の床にありました。(手帳を読みだす)

雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ、丈夫ナカラダヲモチ、慾ハナク決シテ曠(イカ)ラズ、イツモシツカニワラツテイル、一日ニ玄米四合ト味噌ト少シノ野菜ヲタバ、アラユルコトヲ、ジブンヲカンジョウニ入レズ、ヨク、ミキキシワカリ、ソシテワスレズ、野原ノ松ノ林ノ蔭ノ、小サナ萱ブキノ小屋ニイテ……

風の又三郎出てくる。

風の又三郎 東ニ病氣ノコドモアレバ、行ツテ看病シテヤリ、西にツカレタ母アレバ、行ツテソノ稲の束ヲ負ヒ、南ニ死ニサウナ人アレバ、行ツテコワガラナクテモイイトイイ、北ニケンカヤソシヨウガアレバ、ツマラナイカラヤメロトイイ、ヒドリノトキハナミダヲナガシ、サムサノナツハオロオロアルキ。

清六　　ミンナニデクノボートヨバレ。

清六と風の又三郎　ホメラレモセズ、クニモサレズ、サウイウモノニ、ワ
タシハナリタイ。

清六　　風の又三郎、これで終わりか、終わるのか？

風の又三郎　いや、これでは終わらない。皆出てこい！

生徒達、出てきて、椅子に座る。賢治ゆっくりと出てくる。

一郎　　起立！礼！

生徒　　おはようございます。

賢治　　おはよう！

一郎　　着席！

賢治　　では授業を始めます。皆さん。土を耕そう。いいですか皆さん。
故郷を捨ててはいけません。

嘉助　　はい。おら花巻は捨てねえ。

耕助　　おらも捨てねえ。

悦治　　おら、東京へは行かねえ。

嘉助　　本当だな悦治、お前絶対東京さいがねえな。

悦治　　あゝ……

嘉助、
絶対だな！

悦治 そりゃあ、一回か二回はいぐかもしんねえ。

嘉助 いかねえっておら聞いた。なあ皆。

生徒 あゝ、言った。言ったども。

賢治 やめなさい皆。東京へ行くのはいい。行くのはいいが必ず帰ってこい。帰ってきて故郷の土を耕すんだ。いいね。

生徒 はい。

佐太郎 先生、宮澤先生、宇宙はどこさ、あるですか？

賢治 諸君、宇宙はここにある。

佐太郎 どこすか？先生。

賢治 宇宙はほら、君達の手の平にある。

嘉助 嘘だ！ここには何んもねえ。

賢治 いいか、こうやって手を開き、(手を開いて見せる)

生徒達手を挙げて開く。

賢治 思え。生かされている宇宙よ、大きな、大きな宇宙よ、来いと。

生徒 来い！宇宙。来い！

嘉助 だめだ来ねえ。

一郎 来ねえナ！

賢治 いいか、思え、優しい気持ちで、己を捨てて、激しく思うんだ。

来いと…

生徒 (ささやきながらだが強く) 来い!

嘉助 アッ来た、宇宙が、手の中に…

佐太郎 ほんとだ。

きく あっ?

こう あゝ。

一郎 来た、おらも。

悦治 来ねえよ、おら。

嘉助 お前は自分のことばかり考えてるでこねえべ。

悦治 そんな…

賢治 嘉助、お前もこねえぞ。

嘉助 なして、俺はアッ! (嘉助の宇宙は消えてしまう)

賢治 人さ、責めたら、宇宙は消える。責めてはなんねえ。

悦治 あっ来た…

嘉助 おら責めねえ、責めねえよおら…アッそうだ、先生又三郎は?

賢治 あゝ、高田さんの事ですね。高田三郎君はお父さんのお仕事の

都合で、昨日遠くへ行ってしまいました。

嘉助 遠くへ?

賢治 昨日は日曜日だったので、皆に挨拶が出来なかつたんです。

嘉助 又三郎…又三郎!

音楽 — F I。風の又三郎出てくる。

風の又三郎 大地と銀河との間に、何がある？あれは風だよ、修羅の風が吹いているんだ。どんなに遠く離れても、どんなに時が巡っても、風はありとあらゆる隙間を駆け抜ける。そうだ、僕はどこにだっている。僕は風、風の又三郎。

清六だけに灯り。

清六 そう、風の又三郎、君はどこにでもいる。もう君の心配をしなくてすむ程に、どんな小さな図書館にも、どんなにささやかな本屋さんにだって君は居る。兄さん。あれ程書き直し、あれ程世に出す事を望んだ兄さんの本は、もう誰もがまるで手の中の宇宙のように手に入れて、皆が読み、それぞれに愛してくれています。短くても、幸せだったんだよ、兄さんは……いや、違う、幸せを与えたのは兄さん、宮澤賢治だったんだ。

兄さん。もう悔しくはないだろう……決して悔しくは……

清六は開けられていたトランクの蓋を閉じ、トランクを持って、ゆっく

りと歩き始める。
溶暗。

了